

彙報

倫理學會例會

六月十六日(金)午後六時半より學生集會場で次の講演を開いた
 社會實測及其の一例としての自殺の研究 鈴木榮太郎君

社會學會例會

六月十五日(木)午後六時から集會場で開催、

社會の概念

銅直 勇君

教育研究會例會

六月八日午後六時開會、「現今の軍隊教育に就て」と題し文學士加藤仁平君の講演あり、軍隊内に於ては近時個性が大に尊重される事、訓育としては到れるものなる事、他律的訓練も大なる効果あるの實證を得た事、缺點としては實用が主になりて理論が輕ぜられてゐる事従つて學的研究が乏しいとの事等參考に資する所多かつた。

六月十四日午後五時より學生集會場に於て中華民國留學生曹世鈞君送別會を開く、小西先生は海外旅行中にて缺席なるも藤井野上兩先生の列席せらるゝあり、例年の如く谷本先生も出席、心理學教室勤務の人全部出席其他學外の人も加はりて盛會、伊藤幹事の挨拶に次で曹君が「日支親善の爲に日本人は支那語を、先奏や

漢唐のものでなく現代の語を學ばれたまひの希望出て、藤井先生は日本の中學校に支那語を加ふべき事、日支親善の爲には少青年同志が相携ふべき事を續々説かれ、最後に谷本博士は曹君に宜しく稱號を送るべし、更に進んでは學位も送るべしと説かれ其他談論百出愉快なる會であつた。

心理學讀書會例會

六月一日(木)午後三時から學驗室で次の報告があつた。
 Leuba, Three Types of Behavior differentiated.

六月八日(木)

アツハの近著「概念論」に就いて

笠 達 惠君

六月十五日(木)

Chinese Alphabet に就いて

大 脇 義一君

曹 世 鈞君

新著紹介

ユイ純粋認識の論理學

文學士藤岡藏六氏譯述

本書は人も知る如く、獨乙マールセルヒ派哲學の始祖ヘルマンユイエンの哲學體系の基礎をなす Logik der reinen Erkenntnis の(第二版による)譯述である。譯述には云々、譯者が其緒言の中にも断つて居られる様に、要するに一種の抄譯である。譯者の解釋

を施した部分と云つては、——余の日に觸れた限りに於ては、——極めて僅少であつた。——尤も抄譯其事が既に或意味に於て譯者の施す一種の解釋には相違ないのであるが、夫丈讀むには可成讀辛いものである。原著者が既に難解である。一讀再讀位では可成素養のあるものでも、充分其意を理解し難い所も多々あるのであつて、譯者も此點に對して充分なる思慮を、綿密なる注意と出來得る限りの効力とを惜しまれなかつたこと、信する。夫にも拘らず難解であることは、原著其者の性質上止むを得ないことと思はれる。殊にコーエンは語句の使用にも可成穿鑿的であるが、これを其儘邦語に移すことは不可能な場合が多い。譯者が之等の點に就いて爲された苦心の跡は充分察せられる。夫丈に又普通の讀者には益々難解であり、原著を知らない讀者に取つては夫等の語句の意味を充分理解し難い部分も少からずあらうと思はれる。併し夫にも拘らず、又多少の誤譯——或は思違ひ——と思はれる點があるにしても、夫にも拘らず、本書は確に極めて眞面目な述作であるに相違ない。何故ならば、この難解な大部の原著を讀破するさへ可成の勞力であるのに、それを適宜取捨撰擇して——假令其取捨に多少の厭らない所があるにしても——抄譯することは可成の努力を要するアルバイトに違ひないからである。譯者の所謂「一介の短歎となつて荆棘の裡に埋れんこと」の願は、確に眞面目なる研究者のみ持ち得る心願であり、「深山の彼方」にあるコーエの哲學に到らむとして、「小徑を開拓し」「細い鉄を入れる」ことには——譯者の篤き謙辭ではあらうが——倣に成功した著作と云はねばなるまい。譯者の謙抑な態度と、眞面目なる研學の精神とに深

き敬意を捧げたい。聞く所に依れば、譯者は今滞歐中である。恐らくマルブルヒに故人の面影を偲び其學徒と親しく交はるの機を得て多くの得る所があるであらう。吾人は氏の歸朝の囑、多くの新しい研究に依て、吾人を啓發せらるゝことのみ多からむことを切望する。

次に原著の内容を未だ知られない讀者の爲に簡単に紹介の勞を執らう。

コーエンはカントの三批判書を研究し、夫々浩瀚なる「カント經驗理論」「カント倫理學根據付け」「カント美學根據付け」の三著を公にし、續いで「純粹認識の論理學」「純粹意志の倫理學」「純粹感情の美學」の三著を公にし、自己の哲學體系を建設し、マルブルヒ派の名を獨乙思想界に重からしめた。就中此處に譯はせられたる「純粹認識の論理學」は彼の哲學體系の根柢を形くるものであつて、此意味に於て彼の主著中の主著と云つてよい。

本書はカントの純粹理性批判の研究書たる前掲「カント經驗理論」に説述せられたる最後の歸結を更に純化し發展せしめたものと見てよからう。カント哲學の思惟動機は色々あるであらうが、ニエウトン物理學の哲學的根據付けと云ふ事も確に有力な思惟動機であつた事は疑ひない。コーエンは此點にカント哲學の中心を置き、カントを徹底せしめんと努力したものと解せられる。

コーエンは思惟と存在との同一性を主張し、思惟の中に一切實在の根柢を見出さんとした點に於て、新しきエンレア主義である。凡そ一切の實在は思惟に其根柢を置く、かるが故に思惟の形式を論ずる論理學は懸て實在の形式を論ずる形而上學でなければなら

ない。此意味を顯はし、形式論理學上の區別を明示するが爲に、コーエンは本書を「純粹認識の論理學」と名ける。此名稱は同時に所謂普通の心理學との反對をも表示する。認識の現實的過程の論究を任務とする心理學とは異つて、それは純粹認識を取扱ふ論理學である。

凡そ哲學が根本的疑惑から出發して、一切實在の根柢を確立せんとするならば、根柢を置く(Grundlegung)と云ふこと程確實なことはあるまい。根據付けがあつて根據がある。凡そ哲學が一切の豫想を排し、假定を斥け、無豫想的豫想、無假定的假定に立脚しなければならぬとすれば、最終的豫想、最終的假定に基かなければならぬとするならばそれは、豫想の奥に更に豫想を見出し、假定の奥に更に假定を立せんとする思惟其者の本質に之を求めなければなるまい。コーエンが「根源の判断」として打立て、論理學の根柢に置き、同時に彼の全哲學體系の礎石とした根源(Ursprung)の思想は正に此に出發するものであらう。

かくてコーエンは、彼の論理學を判断の論理學として打立てた判断は思惟の根本方向根本活動を標示するものとして、純粋の流れる河床であり、原理法則根本命題等と名つけられるものは、すべて此中に確立せられ、しかも内容に就ては永遠に終結しない又完結しないものとして考へらるべき思惟の根本形式である。かやうな方法の方法を論究するものとして、彼の論理學は打立てられる。

コーエンは先づ本書の序論の部に於て、以上の立場を明にし、次に判断の種類を四種に分ち、第一種の判断を「思惟法則の判断」

と名け「根源の判断」を其首位に置いた。形式論理學に於ては、通常同一律矛盾律、排中律、充足理由律を以て思惟の根本法則として立するのであるが、コーエンは、思惟の根本法則とし、先づ「根源と判断」を掲げ、思惟の本質を以て無限なる活動と解し、思惟が自己自身の中に、一切純粹認識の根源を見出さんとするものであり、感覺的所與を思惟以外に立て、之を以て思惟の根源と見做さんとする一切の感覺主義に反對すること共に、感覺的所與の要求を思惟夫自身の中に基かしめることに依つて、單なる形式的合理論からも手を分たんとするものである。コーエンがかやうな思想に到達したのは明に、數學的自然科學を以て、科學の根本型と考へ、微分法を以て科學探求の根本法と見做し、此處に一切科學的思惟の根柢を見出さんとしてたことに基くであらう。彼は次に「同一性の判断」及「矛盾の判断」を掲げ、純粹認識の内容が無秩序無法則に自由に作り出さるゝものでなくて、論理的價値を保有するもののみが確立せられる所以を明にした。形式論理學の根本原理を巧に換骨脱胎して彼の論理學の學系中に收容したものと見るこゝが出来やう。

第二種の判断として、彼は「數學の判断」を擧げてゐる。之れ即數學的知識の依つて以つて成立する根本的豫想を論明したものである。若し思惟が自己自身の根源より一切純粹認識を作り出し得るとするならば、數學的知識成立の根柢も亦思惟の本質中に根據付けられねばなるまい。此處に於てコーエンは先づ「實在性の判断」を擧げ、論理的思惟に於て「根源の判断」であつたものが、如何に具體化して數學的思惟に於て「實在性の判断」となつて進展したか

を明にした。此に於ては、根源は微分實在性として妥當する。無限小にして初めて實在的たり得る。ΦがΨの根源たり得るのである。無限が有限の基礎なのである。彼は更に進入して「多の判断」「總體性の判断」を立し、自然數無理數等の成立する基礎を明にし時間空間に關する彼の見解を提示した。

第三種の判断の種類は「數學的自然科學の判断」であつた、數學的自然科學從つて一切の自然科學的知識成立の基礎を明にしたものである。此處に於て第一に問題となるは、「實體の判断」である。實體とは「實在性」が數學的思惟の中に基けられたと同じ様に、數學的自然科學の思惟の中に根據付けられなければならない。實體とは素材實在論が考へる様な、或は常識が思惟するやうな固定的な實在ではない。總じて物ではない。それは自然科學的思惟の根本方向を示す純粹認識としての判断である。彼が高調して居る様に實體が實在するのではない。實在性が實體に先つのである。

更には根源的思惟が家體の基礎である。換言すれば根源の判断實在性の判断が數學的自然科學の領域に於て實體の判断となつて具體化するのである。それは凡べてこの運動變化の相關者として想定せらるべき保有(Behalten)である。更に「法則の判断」に至つては、數學的自然科學の有ゆる法則性の基礎は確立せられる。因果關係の如き、要するに此判断内に行はるゝ一の範疇に過ぎない。最後に「概念の判断」に至つて、凡そ對象としての物が立せられる夫と同時に數學的自然科學と記述的自然科學との方法的連絡が明にせられる。此處に至つて今迄述べて來た凡べての構成的判断は完結した實を結ぶと考へ得る。即ち具體化した、我等が自然と呼

ぶ對象界が構成せられるのである。

コーエンは以上三種の對象構成の判断種類の外に批判的判断として第四種「方法論の判断」を擧げ「可能性の判断」「現實性の判断」「必然性の判断」の三者を其中に含ませた。此處に於ては意識の可能性、感覺の現實性、推論の必然性がそれぞれ問題となる。之等は科學的探求を指導する根本概念である。

最後にコーエンは本書の結末に於て「判断の論理學」の節には本書の總括を述べ、「觀念論の論理學」に於ては自己の觀念論の立場を明にし更に「論理學と哲學の體系」に於ては全哲學に於ける論理學の求むる位置、論理學と倫理學美學及文化意識の統一を問題とする心理學との關係を論述して本書を終つて居る。

彼に依れば、論理學は哲學體系の一つのそして第一の方向であり、他の方向は凡べて、其根據付けとして論理學を豫想しなければならぬ。併しそれは只倫理學と美學が其法則を發見する方法的進途を指示するに云ふ意味に於てである。其法則の内容に至つては、倫理學自らが發見しなければならぬ。他の美學心理學に於ても同様である。之等は凡べて其方法的根據を論理學に有する。しかも各分野は夫々獨得の任務と獨立的の意識とを保有する。即ち倫理學は精神科學の論理學として、特異の位置を占め美學の領域に於ては自然及道德の對照が單なる素材として役立ち美的意識に至つて意識は本來の自己意識に達するに云へる。此に美學特有の問題がある。併しそれにも拘らず、此美的意識に於ける意識の統一は、新なる種類の法則と内容との創造である。一切の文化意識が互に獨立的意義を有しながら、しかも相互に密接な相離るゝ事の

出來ない意義を有し統一せらるゝ所以を明にするは自ら別箇の問題に屬する。而して此問題に解答を與ふるものは哲學體系の一般として、しかも其終末を形るに心理學の課題であり、其特有なる職分である。かゝる心理學は従つて普通一般の心理學と其趣を異にするものである事は云ふ迄もない。

併し果して其如何なる内容のものであるかは、コーエンが遂にこれに關する著述を公にするに至らずして逝いたが故に、詳しくは知悉することは出来ない。彼の哲學體系は此點に於て未完成であること云つてもよい。かるが故に彼の衣鉢を繼ぐナトルフは「批判的方法による一般心理學」なる著述を公にし、コーエンの意を祖述せんとして既に其第一巻を公にしたことは多くの人の知る所であらう。

此處に紹介の筆を擱くに當つて、再び譯者の厚き勞力に對して深き敬意を捧げて置かう。東京岩波書店發行、定價金四圓（阿野

留次郎）

京都帝國大學ニ於テ來ル八月一日ヨリ第十三回講演會ヲ開ク聽講志望者ハ左記要項參照來ル七月二十日限り申込マルヘシ

- 一、聽講者ノ資格ハ別ニ定メズ
- 一、講演終了後聽講日數其他ヲ査定シ證明書ヲ授與ス
- 一、聽講志望者ハ聽講科トシテ一科目ニツキ金貳圓ヲ添ヘ申込マルヘシ但シ申込書ニハ聽講科目、族籍、現住所、年齢及業務ヲ記載シ宛名ハ京都帝國大學講演會トスルコト
- 一、宿泊所等ニ就テ申出アルトキハ成ルヘク便利ヲ與フヘシ
- 一、講演科目、講師及時間割等左ノ如シ

鐵筋混凝土構造學	測量術概論、轉鏡儀、水準儀、視距儀、平板ノ使用方法及、使用實習、寫眞測量ノ方法、計算尺、測面器、流測器使用法、地形測量術。	9-11	9-11	一日二日三日四日五日七日八日九日十日							講 師		
				火	水	木	金	土	月	火		水	木
7-9	7-9	9-11	9-11	火	水	木	金	土	月	火	水	木	醫學部教授 宮本英俯
7-9	7-9	9-11	9-11										醫學部教授 石川日出鶴丸
7-9	7-9	9-11	9-11										醫學部助教授 近藤泰夫
7-9	7-9	9-11	9-11										工學部助教授 坂靜雄